



第22回

加齢皮膚 医学研究会

プログラム・抄録集



会 期 2026年 8 月29日(土)・30日(日)

会 場 大阪大学 中之島センター

〒530-0005 大阪市北区中之島 4-3-53

会 頭 藤本 学

(大阪大学医学部 皮膚科学教授)

ご挨拶

第22回加齢皮膚医学研究会

会 頭 藤 本 学

(大阪大学医学部 皮膚科学教授)

2026年8月29日(土)、30日(日)の両日、大阪大学中之島センターにて、第22回加齢皮膚医学研究会を開催する運びとなりました。

本研究会では、加齢皮膚医学講座として、大阪大学微生物病研究所生体統御分野教授の石谷太先生による超短命魚を用いた老化機構研究に関するご講演と、大阪大学名誉教授、大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻 Beyond Cell Reborn 学寄附講座教授の吉森 保先生によるオートファジーと抗老化に関するご講演を予定しております。また、例年通りロート賞受賞記念講演をはじめ、共催セミナーも企画しております。

近年、老化に対する関心はかつてないほど高まりを見せており、「健康長寿」や「ウェルエイジング」といった言葉に象徴されるように、加齢に伴う変化をどのように捉え、どのように対処していくかは、社会的にも極めて重要なテーマとなっています。中でも皮膚は、加齢変化が最も可視化される臓器であり、医学的・社会的観点の双方から注目を集めています。

本研究会では、皮膚の加齢に関する最新の研究成果を広く共有するとともに、基礎・臨床・社会医学の視点を横断する活発な議論を通じて、今後の高齢社会を見据えた新たな展開を模索してまいります。そして本研究会が、加齢皮膚医学の新たな知見と未来への可能性を共有し、参加者の皆様とともに学問をさらに前進させる場となりますことを心より願っております。

会場の大阪中心部・中之島にあります本学の中之島センターは、周辺には再整備が進む大阪城公園や中之島の水辺の景観に加え、現代美術の拠点として注目を集める大阪中之島美術館も位置しており、街歩きにも大変魅力的なエリアです。日本の医学史上名高い適塾（重要文化財）もほど近い距離にあります。懇親会を含め、現地対面での学会開催を予定しております。夏休みの終わりに是非大阪にお越しください。

学問的にも、また大阪ならではの雰囲気を感じていただく点でも充実した研究会となるよう準備を進めております。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

開催概要

会 期：2026年 8 月29日（土）・30日（日）

会 場：大阪大学 中之島センター 10F ホール
〒530-0005 大阪市北区中之島4-3-53
TEL：06-6444-2100

会 頭：藤本 学（大阪大学医学部 皮膚科学教授）

事務局：大阪大学医学部皮膚科学教室
〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-2
TEL：06-6879-3031 FAX：06-6879-3039
E-mail：karei22@derma.med.osaka-u.ac.jp
<https://plaza.umin.ac.jp/karei22/index.html>

関連行事日程

1. 世話人会・幹事会

日時：2026年 8 月30日（日） 8：30～8：55
会場：中之島センター 8F 大会議室

2. 総会

日時：2026年 8 月30日（日） 10：10～10：25
会場：中之島センター 10F ホール

3. 令和8年度ロート賞授賞式

日時：2026年 8 月30日（日） 10：25～10：35
会場：中之島センター 10F ホール

4. 令和7年度ロート賞受賞記念講演

日時：2026年 8 月30日（日） 10：35～11：20
会場：中之島センター 10F ホール

5. 懇親会

日時：2026年 8 月29日（土） 19：00～（イブニングセミナー終了後）
会場：中之島センター 9F サロン・アゴラ

参加者の皆様へ

1. 参加登録方法

現地にてのみ受付いたします。

日 時：2026年 8 月29日（土）10：30～18：00

2026年 8 月30日（日） 8：30～13：00

場 所：大阪中之島センター 10F ホール

参加費：5,000円（現金のみ）

2. プログラム・抄録集

会員の皆様には事前にメールにて PDF をお送りさせていただいております。

当日会場にもプログラム冊子をご用意しております。

3. 参加証および参加費領収書

当日参加受付の際に、参加証ならびに参加領収書をお渡しいたします。

参加証はネームカードも兼ねておりますので、会場内ではカードホルダーをご利用ください。

4. 単位受付 機構認定専門医制度（新専門医制度）

専門医後実績は電子受付ですので、日皮会会員証を忘れずにご持参ください。

加齢皮膚医学講座 1

受付時間： 8 月29日（土）13：40～14：25

加齢皮膚医学講座 2

受付時間： 8 月29日（土）16：05～16：50

※新専門医制度の聴講単位が付与されるためには、各講演の開始30分前から開始後15分までに受付を完了していただく必要があります。途中退席をした場合は聴講単位が認められない場合があります。

5. その他

- ・会場内では、必ずネームカードの入ったホルダーを首から掲げてください。
- ・会場内では、携帯電話をマナーモードに設定してください。
- ・講演内容の録音、撮影、ビデオ撮影はご遠慮ください。
- ・駐車場はございませんので、近隣のコインパーキングをご利用ください。
- ・センター内には、クロークはございません。ご了承ください。
- ・当日は暑さが予想されますので、クールビズ（軽装）でお越しください。

座長・演者へのご案内

1. 座長へのお願い

座長は担当されるセッションの開始前までに会場内次座長席へご着席ください。
なるべくプログラムの時間内に終了するようお願いします。

2. 演者へのお願い

発表時間

一般演題の発表時間は、発表と討論の計10分です。

発表スライドについて

PowerPoint にて作成したスライドが映写可能です。
スクリーンは1面映写で、画面設定は16：9での作成をお勧めします。
音声や発表者ツールの使用はできません。
動画データがある場合はスライドデータ内に埋め込むか、リンクする場合はスライドデータと同一フォルダに入れてお持ちください。

発表データの PC 受付

持ち込み可能メディアは USB メモリーです。
発表予定時間の30分前までに受付へお持ちください。
一般演題では個人使用のパソコンでの発表はできません。
保存時のデータファイル名は、演題番号と筆頭演者名としてください。
Macintosh でデータを作成された場合は Windows パソコンで正常に再生されることを確認したデータを USB メモリーでお持ちください。受付会場で動作確認をお願いいたします。

発表方法

発表は現地でのデジタルプレゼンテーションとなります。
現地での発表中のスライド操作に関しましては演台上のキーボード、マウスをご使用の上操作していただきます。

特別講演・スポンサードセミナーについて

Macintosh で発表される方は、必ずご自身の PC ならびに HDMI が接続できるコネクタをご持参ください。

利益相反 (COI) の開示について

医学研究に関する発表・講演に際し、利益相反 (COI) の開示が必要となります。COI の有無にかかわらず、筆頭発表者は今回の演題発表に際して医学研究に関する企業や営利団体との過去3年間における利益相反状態の有無を、発表スライドの最初（または演題・発表者などを紹介するスライドの次）に開示をお願いいたします。

詳細は、公益社団法人日本皮膚科学会 HP 上に掲載の「COI ガイドライン」をご確認ください。

交通案内



アクセス

電車でお越しの場合

京阪電車 中之島線

「中之島」駅6番出口より徒歩約5分

「渡辺橋」駅1番出口より徒歩約5分

大阪メトロ 四つ橋線

「肥後橋」駅4番出口より徒歩約10分

大阪メトロ 御堂筋線

「淀屋橋」駅7番出口より徒歩約16分

JR 東西線

「新福島」駅より徒歩約9分

JR 環状線

「福島」駅より徒歩約12分

阪神電車 本線

「福島」駅より徒歩約9分

バスでお越しの場合

北港バス（中之島ループバス ふらら）

「大阪大学中之島センター前」下車 徒歩約1分

新幹線でお越しの場合

新大阪駅から

大阪メトロ御堂筋線で「淀屋橋」駅下車、京阪電車中之島線に乗り換え「中之島」駅下車、徒歩約5分

所要時間：約30分

飛行機でお越しの場合

伊丹空港（大阪国際空港）から

空港リムジンバスで「大阪駅前（梅田）」下車、大阪メトロ四つ橋線「西梅田」駅より「肥後橋」駅下車、徒歩約10分

所要時間：約50分

関西国際空港から

JR 関空快速で「大阪」駅下車、大阪メトロ四つ橋線「西梅田」駅より「肥後橋」駅下車、徒歩約10分

所要時間：約90分

お車でお越しの場合

会場には専用駐車場がありません。お車でお越しの方は、近隣のコインパーキングをご利用ください。公共交通機関のご利用をお勧めいたします。

日程表

8月29日(土)	
講演会会場 10F ホール	
11:00	11:00~11:10 開会式
	11:10~11:50 一般演題1 演題番号 1~4 座長 神人 正寿、清原 英司
12:00	12:00~13:00 ランチョンセミナー 講演1「皮膚免疫の加齢変化」 座長：神人 正寿 演者：渡邊 玲 講演2「高齢化社会で求められる理想的な皮膚腫瘍の治療とは～加齢に伴う身体的・社会的変化を見据えて～」 座長：浅田 秀夫 演者：藤澤 康弘 共催：サンファーマ株式会社
13:00	13:15~13:55 一般演題2 演題番号 5~8 座長 渡辺 大輔、吉岡 華子
14:00	14:10~15:10 加齢皮膚医学講座1 「ヒトデータと超短命魚で暴き出す 未知の老化制御機構」 座長：藤本 学 演者：石谷 太
15:00	15:30~16:30 スイーツセミナー 講演1「高齢化社会を見据えた乾癬治療戦略 ー長期視点で考えるべき全身治療」 座長：渡辺 大輔 演者：谷崎 英昭 講演2「加齢を見据えた乾癬マネジメント～PsOからPsA までをつなぐソーティグツの新たな位置づけ～」 座長：高橋 健造 演者：杉浦 一充 共催：ブリストル・マイヤーズ スクイブ株式会社
16:00	16:35~17:35 加齢皮膚医学講座2 「オートファジー： 疾患と老化に対抗する細胞の守護者」 座長：梶島 健治 演者：吉森 保
17:00	17:45~18:45 イブニングセミナー 講演1「IL-17を標的にした乾癬の治療戦略 ～疾病負荷の軽減を見据えて～」 座長：梶島 健治 演者：多田 弥生 講演2「臨床試験データから考察するファーストバイ オとしてのイブグリースの可能性」 座長：梶島 健治 演者：天野 博雄 共催：日本イーライリリー株式会社
18:00	19:00 懇親会 (9F サロン・アゴラ)

8月30日(日)	
講演会会場 10F ホール	
8:30	8:30~8:55 世話人会・幹事会 (8F 大会議室)
9:00	9:00~10:00 モーニングセミナー 講演1「結節性痒疹治療のパラダイムシフト ーデュピルマブの可能性ー」 座長：下村 裕 演者：中島沙恵子 講演2「水疱性類天疱瘡における新規治療戦略： デュピクセントの位置づけ」 座長：新熊 悟 演者：鶴田 大輔 共催：サノフィ株式会社
10:00	10:10~10:25 総会
	10:25~10:35 ロート賞授賞式
11:00	10:35~11:20 ロート賞受賞記念講演会 座長：鶴田 大輔 受賞者 高橋 岳浩、中溝 聡、肥田 時征
	11:30~12:10 一般演題3 演題番号 9~12 座長 下村 裕、植田 郁子
12:00	12:20~13:20 ランチョンセミナー 講演1「高齢慢性腎臓病 (CKD) 患者への帯状疱疹治療 ～安全性を踏まえた最適治療～」 座長：石川 治 演者：猪阪 善隆 講演2「帯状疱疹診療の診断と治療 Update」 座長：石川 治 演者：川村 龍吉 共催：マルホ株式会社
13:00	13:30~13:50 一般演題4 演題番号 13~14 座長 川村 龍吉、横井 一範
	13:55~14:10 特別講演 (代表世話人退任記念) 座長：鶴田 大輔 演者：神保 孝一
14:00	14:10~14:20 閉会式

プログラム

1日目 2026年8月29日(土)

開会式 11:00~11:10

一般演題 1 11:10~11:50

座長：神人 正寿（和歌山県立医科大学 皮膚科）
清原 英司（大阪大学 皮膚科）

1 大阪・関西万博大規模コホートにおける皮膚老化の多因子構造と全身老化指標との関連

久野 彩、中川誠太郎、藤本 学
（大阪大学 皮膚科）

2 第10回 NDB オープンデータより検討した皮膚がん治療の実際

横見 明典、高塚麻由香、直原 成美、須藤 ゆか、後藤 範子
（市立豊中病院 皮膚科）

3 顔面画像解析システムを用いた有棘細胞癌患者の皮膚老化の検討

神人 正寿、坂本 翔一、山本 有紀
（和歌山県立医科大学 皮膚科）

4 高齢者に発症した深部解離性皮下血腫の1例
— 抗凝固薬内服下での治療経過と考察 —

鈴木 琢
（横浜総合病院 皮膚科）

ランチョンセミナー 12:00~13:00

共催：サンファーマ株式会社

講演 1

皮膚免疫の加齢変化

座長：神人 正寿（和歌山県立医科大学 皮膚科）

順天堂大学皮膚科 主任教授 渡邊 玲（わたなべ れい）

講演 2

高齢化社会で求められる理想的な皮膚腫瘍の治療とは ～加齢に伴う身体的・社会的変化を見据えて～

座長：浅田 秀夫（奈良県医科大学 皮膚科）

愛媛大学大学院医学系研究科皮膚科学 教授 藤澤 康弘（ふじさわ やすひろ）

座長：渡辺 大輔（愛知医科大学 皮膚科）
吉岡 華子（大阪大学 皮膚科）

5 VZV 髄膜脳炎を発症した高齢者の一例

柴垣 裕、岡本 崇、島田 眞路、川村 龍吉
（山梨大学医学部 皮膚科）

6 高齢者のリウマチ性多発筋痛症に発症した播種性ノカルジア症の1例

佐藤 佑哉¹、濱口 儒人¹、大石 京介¹、前田進太郎¹、松下 貴史¹、久保 赳人²、
谷内 克成³
（¹金沢大学 皮膚科、²同感染制御部、³能登総合）

7 中條・西村症候群モデルマウスにおける加齢性病態と免疫老化の解析

原 知之¹、木下 晃²、濱崎 純³、邊見 弘明⁴、加藤 喬^{4,5}、佐々木 泉⁴、稲葉 豊¹、
山下 友佑⁶、奥崎 大介⁷、吉浦孝一郎^{2,8}、村田 茂穂³、神人 正寿¹、改正 恒康⁹、
金澤 伸雄^{1,10}

（¹和歌山県立医科大学皮膚科、²長崎大学原爆後障害医療研究所人類遺伝学研究分野、³東京大学大学院薬学系研究科蛋白質代謝学教室、⁴和歌山県立医科大学先端医学研究所生体調節機構研究部、⁵和歌山県立医科大学リウマチ・膠原病内科、⁶和歌山県立医科大学血液内科、⁷大阪大学免疫学フロンティア研究センターヒト免疫学（単一細胞ゲノミクス）、⁸長崎大学大学院医歯薬学総合研究科人類遺伝学先端医療研究コアユニット、⁹和歌山県立医科大学産官学連携推進本部、¹⁰兵庫医科大学皮膚科学）

8 COL17A1 Restoration as a Key Mechanism in Apocynin's Anti-Senescence Effect

Tuba M. Ansary, Koji Kamiya, MD Razib Hossain, Mamitaro Ohtsuki, Mayumi Komine
（Department of Dermatology, Faculty of Medicine, Jichi Medical University）

座長：藤本 学（大阪大学 皮膚科）

ヒトデータと超短命魚で暴き出す 未知の老化制御機構

大阪大学微生物病研究所 環境応答研究部門 生体統御分野 教授 石谷 太（いしたに とおる）

スイーツセミナー

15:30～16:30 共催：ブリストル・マイヤーズ スクイブ株式会社

講演 1

座長：渡辺 大輔（愛知医科大学 皮膚科学講座）

高齢化社会を見据えた乾癬治療戦略 — 長期視点で考えるべき全身治療

関西医科大学皮膚科学講座 教授 谷崎 英昭（たにざき ひであき）

講演 2

座長：高橋 健造（琉球大学大学院医学研究科 皮膚科学講座）

加齢を見据えた乾癬マネジメント～ PsO から PsA までをつなぐソーティクツの新たな位置づけ～

藤田医科大学医学部皮膚科学 教授 杉浦 一充（すぎうら かずみつ）

加齢皮膚医学講座 2

16:35～17:35

座長：梶島 健治（京都大学大学院医学研究科 皮膚科学）

オートファジー：疾患と老化に対抗する細胞の守護者

大阪大学名誉教授、同大学院医学系研究科保健学専攻 Beyond cell Reborn 学寄附講座 特任教授

吉森 保（よしもり たもつ）

イブニングセミナー

17:45～18:45

共催：日本イーライリリー株式会社

講演 1

座長：梶島 健治（京都大学大学院医学研究科 皮膚科学）

IL-17を標的にした乾癬の治療戦略 ～疾病負荷の軽減を見据えて～

帝京大学医学部 皮膚科学講座 主任教授 多田 弥生（ただ やよい）

講演 2

座長：梶島 健治（京都大学大学院医学研究科 皮膚科学）

臨床試験データから考察するファーストバイオとしてのイブグリースの可能性

岩手医科大学医学部 皮膚科学講座 教授 天野 博雄（あまの ひろお）

プログラム

2日目 2026年8月30日（日）

世話人会・幹事会 8:30~8:55

モーニングセミナー 9:00~10:00

共催：サノフィ株式会社

講演1

座長：下村 裕（山口大学 医学部 皮膚科学講座）

結節性痒疹治療のパラダイムシフト — デュピルマブの可能性 —

京都大学大学院医学研究科 炎症性皮膚疾患創薬講座 特定准教授 中島沙恵子（なかじま さえこ）

講演2

座長：新熊 悟（奈良県立医科大学 皮膚科学教室）

水疱性類天疱瘡における新規治療戦略：デュピクセントの位置づけ

大阪公立大学大学院 医学研究科 皮膚病態学 教授 鶴田 大輔（つるた だいすけ）

総会 10:10~10:25

ロート賞授賞式 10:25~10:35

プレゼンター：鶴田 大輔（大阪公立大学大学院 医学研究科 皮膚病態学）

1. 表皮構造が規定する抗原特異的免疫応答の精度と加齢変容の解明

大阪大学大学院医学系研究科 皮膚免疫疾患治療学 共同研究講座 特任講師
石塚 洋典（いしづか ようすけ）

2. 爪由来 RNA 解析による加齢皮膚状態モニタリング基盤の構築

国立大学法人金沢大学 医薬保健研究域医学系革新ゲノム情報学分野 准教授
岩淵 禎弘（いわぶち さだひろ）

3. 毛包上皮におけるオートファジー活性の加齢性低下と毛髪老化表現型との関連とその可逆性の検証

順天堂大学大学院医学研究科 皮膚科学アレルギー学 先任准教授 吉原 渚（よしはら なぎさ）

ロート賞受賞記念講演会 10:35～11:20

座長：鶴田 大輔（大阪公立大学大学院 医学研究科 皮膚病態学）

1. 長期罹患円形脱毛症における間質老化の解析

東北大学ヘルスパン研究センター 皮膚老化抑制研究分野 准教授
高橋 岳浩（たかはし たけひろ）

2. ヒト皮膚老化における線維芽細胞サブセットの1細胞 トランスクリプトーム・エンハンサー解析

京都大学大学院医学研究科 先端医療基盤共同研究講座（皮膚科兼任）特定准教授
中溝 聡（なかみぞ さとし）

3. ロングリードシーケンスを用いた高齢発症末端メラノーマのゲノム解析

札幌医科大学医学部皮膚科学講座 准教授 肥田 時征（ひだ ときまさ）

一般演題 3

11:30～12:10

座長：下村 裕（山口大学 皮膚科）
植田 郁子（大阪大学 皮膚科）

9 split skin IIF で表皮側陽性を示した粘膜類天疱瘡に乳癌を含む多臓器腫瘍性病変を 合併した1例

鈴木 梨沙、濱 菜摘、須田有裕子、木村 春奈、長谷川瑛人、阿部理一郎
（新潟大学医歯学総合病院 皮膚科）

10 マウス表皮での酸性セラミダーゼ過剰発現は角層セラミドの減少から老人性乾皮症 を生じる

芋川 玄爾^{1,2}、高田真理子¹、指川（木村）未歩²、小宮根真弓²、大槻マミ太郎²
（¹宇都宮大学 バイオサイエンス教育研究センター、²自治医科大学 皮膚科）

11 多型慢性痒疹を再考する

石川 治
（石井病院 皮膚科）

12 ポリコナゾールの長期内服中に生じた多発日光角化症・有棘細胞癌の1例

西田 悟^{1,2}、安野秀一郎¹、浅野 伸幸¹、下村 裕¹
（¹山口大学 皮膚科、²山口赤十字病院 皮膚科）

ランチョンセミナー 12:20～13:20

共催：マルホ株式会社

講演 1

座長：石川 治（石井病院）

高齢慢性腎臓病（CKD）患者への帯状疱疹治療 ～安全性を踏まえた最適治療～

大阪大学大学院医学系研究科、腎臓内科学講座 教授 猪阪 善隆（いさか よしたか）

講演 2

座長：石川 治（石井病院）

帯状疱疹診療の診断と治療 Update

山梨大学医学部皮膚科 教授 川村 龍吉（かわむら たつよし）

一般演題 4 13:30～13:50

座長：川村 龍吉（山梨大学 皮膚科）
横井 一範（大阪大学 皮膚科）

13 超高齢者の顔面に生じ、放射線治療が奏功したメルケル細胞癌の1例

戸次 優太、正畠 千夏、光井 康博、西村 友紀、新熊 悟

（奈良県立医科大学 皮膚科）

14 高齢天疱瘡患者に対するリツキシマブ導入例と当科投与例の臨床的検討

鈴木優紀恵、廣保 翔、鶴田 大輔

（大阪公立大学 皮膚科）

特別講演 13:55～14:10

座長：鶴田 大輔（大阪公立大学大学院 医学研究科 皮膚病態学）

代表世話人退任記念

皮膚病総合医学研究所 神保 孝一（じんぼ こういち）

閉会式 14:10～14:20

指定演題 抄録

ヒトデータと超短命魚で暴き出す 未知の老化制御機構

石 谷 太

大阪大学微生物病研究所
環境応答研究部門 生体統御分野 教授



老化・寿命制御の研究は、生命科学のフロンティア領域であり、近年、この領域の研究が活発化している。これにより、12の老化要因（テロメア短縮や幹細胞の機能低下、細胞老化などの細胞レベルの変化）が明らかにされたが、その一方で、多臓器連関により進行する全身の老化機構の理解は進んでいない。老化・寿命制御研究においては生物の寿命長が律速であり、例えばマウスを用いた場合は2－3年も必要になってしまうことが、大きな障壁となっていた。したがって、老化・健康寿命制御の分子基盤の理解を推進するためには、モデル生物解析に要する時間という障壁を解消する必要がある。我々は、この問題を解決する新たなモデル生物としてターコイズキリフィッシュ（略称キリフィッシュ）に注目している。この魚はヒトと類似した老化表現型を示すのみならず、寿命がわずか数ヶ月であるため、短期間で多数個体の分子・細胞・臓器・個体レベルの時系列データを取得できる。加えて、系統間や雌雄で寿命が異なるため、個体差・性差の分子基盤解析にも利用できる。現在我々は、寿命・健康寿命の異なる動物種間・系統間・個体間の比較オミクスデータ解析により見つけた健康長寿の候補要因（遺伝子多型や酵素活性、代謝物等）を超短命魚キリフィッシュにゲノム編集等で導入して健康長寿を合成することで、健康長寿の実現につながる新たな因子や抗老化物質をスクリーニングする、という戦略をとっている。本講演でこのアプローチによって見出した、意外な健康長寿制御機構や皮膚幹細胞老化機構をご紹介します。

略 歴

1998年 名古屋大学理学部卒業
2002年 同大学院理学研究科修了
2002年 名古屋大学博士研究員
2006年 九州大学生体防御医学研究所特任准教授／特任助教授（独立）
2011年 九州大学生体防御医学研究所准教授（独立）
2017年 群馬大学生体調節研究所教授
2019年～ 大阪大学微生物病研究所教授（現職）
2024年～ AMED-CREST 性差個体差領域 研究代表者

委員： 分子生物学会 生命教育担当理事、細胞生物学会理事、発生生物学会理事

MEMO

オートファジー：疾患と老化に対抗する細胞の守護者

吉 森 保

大阪大学名誉教授、同大学院医学系研究科
保健学専攻 Beyond cell Reborn 学寄附講座 特任教授



オートファジーとは、膜構造オートファゴソームが担う細胞内分解機構である。演者は2016年にノーベル生理学・医学賞を受賞された大隅良典博士と共に黎明期から分野を牽引しその発展に貢献してきた。オートファゴソーム結合タンパク質 LC3やオートファジー抑制タンパク質 Rubicon を世界で初めて同定するなど、哺乳類オートファジーの分子機構について多くの成果をあげてきた。

我々は、オートファジーが細胞内に侵入した病原性細菌を認識し排除することを世界に先駆け発見し、認識機構も明らかにした。損傷を受けたリソソームがオートファジーにより除去されることも示した。皮膚については、ケラチノサイトにおけるメラノソーム分解がオートファジーによること、皮膚の老化部位でオートファジーが低下していることを見出している。

多くの組織においてオートファジーは加齢により低下するが、我々はそれが Rubicon 増加に起因することを明らかにした。Rubicon の発現を抑制すると、寿命が延長し、パーキンソン病等の加齢性疾患複数が抑えられた。細胞老化も Rubicon 抑制で抑えられる。オートファジー活性化が健康寿命を延伸する可能性があることから、スタートアップ企業 AutoPhagyGO を創業し、最近、徳島県の伝統的な発酵茶である阿波晩茶のエキスを強力なオートファジー促進作用があることを見出した。

略 歴

大阪大学名誉教授、同大学院医学系研究科寄附講座 特任教授

1958年大阪生まれ。大阪大学理学部生物学科から同大学院医学研究科に進む。医学博士。私大助手、ドイツ留学を経て1996年に国立基礎生物学研究所助教授に着任し、大隅良典教授（2016年ノーベル生理学・医学賞受賞）の右腕として黎明期のオートファジー分野を切り拓いた。その後、国立遺伝学研究所教授、大阪大学大学院生命機能研究科及び医学系研究科教授、生命機能研究科長などを歴任し2026年から現職。

文部科学大臣表彰科学技術賞、上原賞、紫綬褒章、他受賞多数。元日本細胞生物学会会長。2019年 AutoPhagyGO 社創業。論文総被引用数が分子生物学分野で国内2位世界22位。

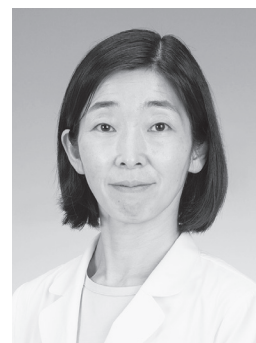
趣味は、マラソン／トレイルランニング、世界のラバーダック収集、雲見、靴磨き、世界の美術館巡り、色鉛筆画、Perfume、BlackPink、BabyMetal、他多数。

MEMO

講演 1 皮膚免疫の加齢変化

渡 邊 玲

順天堂大学皮膚科 主任教授



皮膚は、外界との境界を形成するバリア組織であると同時に、多様な免疫細胞が常在する巨大な免疫組織でもある。皮膚の加齢変化としては、加齢に伴い皮膚構造が変化するだけでなく、免疫細胞の構成、活性化状態や代謝機構にも変化が生じる。長期間皮膚に留まり局所免疫を担う resident memory 細胞（TRM）は、感染防御や腫瘍免疫に寄与する一方、乾癬、白斑、アトピー性皮膚炎などの皮膚慢性疾患においては、疾患の免疫プロファイルを反映した TRM が構築され、疾患の再燃や慢性化に関与すると考えられる。高齢者の皮膚では、慢性炎症の背景が併存し、免疫機能は単純に低下するのではなく、質的に変容すると考えられ、この変容は皮膚慢性疾患の遷延に伴う変容とも一部共通すると考えられる。本講演では、皮膚における免疫老化の特徴を概説し、乾癬をはじめとする炎症性皮膚疾患の免疫プロファイルの特徴を踏まえ、その共通性について考察したい。

略 歴

2001年 3 月	東京大学医学部医学科卒業
2001年 6 月－2003年 3 月	東京大学医学部附属病院・東京厚生年金病院 皮膚科研修医
2003年 4 月－2007年 3 月	東京大学大学院医学系研究科外科学専攻 博士課程
2007年 4 月－2009年 8 月	東京大学医学部附属病院皮膚科 助教 国立国際医療センター皮膚科 医系技官
2009年 9 月－2014年 3 月	Research fellow, Brigham and Women's Hospital, Department of Dermatology
2014年 4 月－ 7 月	東京大学医学部附属病院皮膚科 助教
2014年 7 月－2015年 9 月	同 講師
2015年10月－2020年 3 月	筑波大学医学医療系皮膚科 講師
2020年 4 月－ 2023年 3 月	大阪大学大学院医学系研究科 アレルギー免疫疾患統合医療学 寄附講座 准教授
2023年 4 月－11月	同 皮膚免疫疾患治療学共同研究講座 特任准教授
2023年12月－	順天堂大学医学部皮膚科学講座 主任教授

講演 2

高齢化社会で求められる理想的な皮膚腫瘍の治療とは
～加齢に伴う身体的・社会的変化を見据えて～

藤 澤 康 弘

愛媛大学大学院医学系研究科 皮膚科学 教授



超高齢社会を迎えた本邦における皮膚腫瘍診療では、ガイドラインで推奨される標準治療が、必ずしも患者が求めている結末に結びつくとは限らない。高齢患者は身体的脆弱性や認知症に加え、老老介護をはじめとする社会的課題を抱えていることが多く、若年者と同じ対応では不十分である。本講演では、加齢に伴う諸変化を見据えた「理想的な皮膚腫瘍の治療」について、2つの軸で考察する。前半は局所制御における「引き算の医療」として、過度な手術を避け、いかに簡便かつ低侵襲で済ませるか、その具体的な工夫について症例を交えて紹介する。後半は進行期・手術不能症例における全身療法の限界について触れ、薬物療法を「どこまでやるか」の判断や、緩和的なマネジメントについても触れたい。根治（Cure）と、患者の人生を支える（Care）ための現実的なバランスの取り方について考えてみたい。

略 歴

- 1998年 3 月 筑波大学卒業
- 1998年 5 月 筑波大学臨床医学系皮膚科学教室 入局（大塚藤男 教授）
- 2000年 6 月 国立がんセンター中央病院 皮膚科レジデント（山本明史 部長）
- 2003年 6 月 筑波大学附属病院 皮膚科 医員
- 2005年 4 月 筑波大学大学院（血液内科・小野寺研究室）
- 2009年 4 月 筑波大学大学院人間総合科学研究科 皮膚科 講師
- 2015年 4 月 米国 Duke 大学メディカルセンター免疫学教室 客員講師
（Thomas F. Tedder 教授）
- 2016年10月 筑波大学医学医療系 皮膚科 講師（藤本学 教授）
- 2018年 4 月 筑波大学附属病院 病院教授（併任）
- 2018年 6 月 筑波大学医学医療系 皮膚科 准教授
- 2022年 5 月 愛媛大学大学院医学系研究科 皮膚科学 教授

講演 1

高齢化社会を見据えた乾癬治療戦略
— 長期視点で考えるべき全身治療

谷 崎 英 昭

関西医科大学 皮膚科学講座 教授



近年、乾癬治療は選択肢の拡大により、皮疹およびQOLが飛躍的に改善している。一方で乾癬は完治することがなく、発症年齢によっては20年以上遷延しうる慢性疾患であり、患者の疾病負担は大きい。したがって、適切なタイミングで治療介入し、疾患そのものによる負担と治療負担の双方を軽減しながら、患者の日常生活に支障のない状態を維持することが求められる。加齢に伴う併存疾患や併用薬、感染症リスクなども踏まえ、短期の効果のみならず、患者のライフステージを見据えて長期にわたり安全かつ安定して治療を継続できる薬剤選択が重要となる。

デュークラバシチニブはTYK2をアロステリックに阻害する1日1回の経口薬であり、臨床試験で良好な有効性・安全性が示されており、高齢者にも福音をもたらすことが期待できる。また、頭皮・爪などの難治部位にも効果が期待され、長期投与試験においても有効性の維持と安全性プロファイルの一貫性が報告されている。

本講演では自験例を交え、インフォームドコンセントとフォローアップの工夫を含め、長く付き合う乾癬だからこそライフステージを通じて安心して続けられる治療設計について考察する。

略 歴

2002年 3 月	島根医科大学（現島根大学）医学部医学科	卒業
2002年 5 月～	京都大学医学部附属病院	皮膚科 研修医
2003年 6 月～	島根県立中央病院	皮膚科 嘱託医
2005年 4 月～	京都大学医学部附属病院	皮膚科 医員
2006年 4 月～2010年 3 月	京都大学大学院医学研究科	皮膚科学
2010年 4 月～	京都大学医学部附属病院	皮膚科 助教
2012年 4 月～	長浜赤十字病院	皮膚科 副部長（代表部長）
2013年 4 月～	京都大学医学部附属病院	皮膚科 助教
（2013年 9 月～10月 Department of Dermatology, University of Colorado Denver に留学）		
2015年 4 月～	大阪医科大学附属病院	皮膚科 講師
2020年 4 月～	関西医科大学附属病院	皮膚科 教授
現在に至る		

講演 2

**加齢を見据えた乾癬マネジメント
～ PsO から PsA までをつなぐソーティクツの
新たな位置づけ～**

杉 浦 一 充

藤田医科大学 医学部皮膚科学 教授



乾癬は皮膚症状にとどまらず、関節症状、併存疾患、生活機能低下を伴いうる慢性炎症性疾患である。特に高齢化が進む実臨床では、長期にわたり安全性と有効性のバランスを保ちながら、患者のライフステージに応じた治療選択を行うことが重要となる。また、乾癬性関節炎は見逃されやすく、皮膚科診療の段階で関節症状を早期に拾い上げ、将来的な構造的障害や QOL 低下を意識した介入が求められる。本講演では、Psoriatic Disease という視点から、皮膚病変と関節病変を一連の病態として捉え直し、TYK2阻害薬 ソーティクツ の臨床的位置づけを考察する。尋常性乾癬から乾癬性関節炎までを見据えた治療戦略の中で、ソーティクツがどのような患者像に適するのか、最新データと実臨床での活用を踏まえて概説する。

略 歴

1994年 3 月 名古屋大学医学部卒業
1994年 4 月 愛知県厚生農業協同組合連合会更生病院 研修医
1998年 8 月 The Scripps Research Institute, Research Associate
1999年 3 月 名古屋大学大学院医学研究科博士課程 専攻修了
2001年 8 月 名古屋大学大学院医学系研究科生物化学講座 助手
2003年10月 名古屋大学大学院医学系研究科皮膚病態学 助手
2004年 9 月 同上 講師
2008年 8 月 同上 准教授
2016年 4 月 藤田保健衛生大学（藤田医科大学）医学部皮膚科学 教授
2026年 5 月 藤田医科大学病院 副院長（教育研修・働き方改革担当）

講演 1

IL-17を標的にした乾癬の治療戦略
～疾病負担の軽減を見据えて～

多 田 弥 生

帝京大学医学部 皮膚科学講座 主任教授



乾癬は単なる皮膚疾患にとどまらず、精神的苦痛・併存疾患・社会的孤立など多面的な疾病負担をもたらす全身性疾患である。日本人患者においても、QOL への影響は重症度に比例して大きく、疾患啓発と早期介入の重要性が改めて示されている。長期にわたる罹患は疾病負担を蓄積させるため、早い段階での全身療法導入が CLCI の軽減に寄与する可能性がある。

こうした背景のもと、生物学的製剤、IL-17阻害薬などは患者満足度が高く、乾癬の炎症カスケード下流を速やかに遮断することで即効性をもたらす。イクセキズマブ（IXE）は IL-17A に対する高い親和性を特長とし、爪・頭皮・掌蹠・陰部といった難治部位への効果、バイオ使用歴を問わない有効性、高体重患者への対応など、多様な臨床ニーズに応える薬剤である。

さらに長期投与における有効性の持続と許容可能な安全性プロファイル、また治療中断後の効果持続性や膿疱性乾癬への対応も臨床上の重要な特性である。本講演では、これらのエビデンスを整理し、乾癬診療において IXE が果たすべき役割について考察する。

略 歴

平成7年3月 東京大学医学部医学科卒業
平成7年6月 東京大学医学部皮膚科入局
平成14年4月 米国国立衛生研究所（NIH）皮膚科留学（研究員）
平成17年4月 帝京大学医学部皮膚科・助手
平成18年4月 東京大学医学部皮膚科・助手
平成20年4月 東京大学医学部皮膚科・講師
平成23年3月 立正佼成会附属佼成病院皮膚科・部長
平成25年7月 帝京大学医学部皮膚科・准教授
平成29年4月 帝京大学医学部皮膚科・主任教授

講演 2

臨床試験データから考察する
ファーストバイオとしてのイブグリースの可能性

天 野 博 雄

岩手医科大学医学部皮膚科学講座 教授



アトピー性皮膚炎の治療は、生物学的製剤/JAK 製剤などの分子標的薬の登場により著しく進歩している。そして2024年5月からは最新の分子標的薬である IL13阻害剤イブグリースも新たに治療の選択肢として加わった。

本講演では、発売から2年が経過したが、改めてイブグリースの臨床試験データと自験例の手応えから薬剤としての特性、強みを考察し、この薬剤が新たにアトピー性皮膚炎治療薬で提供できる価値は何か、そしてこれから新たなファーストバイオになり得る可能性について検討してみたい。

略 歴

- 1987年3月 東京都立 西 高等学校 卒業
- 1993年3月 群馬大学医学部 卒業
- 1993年6月 群馬大学医学部附属病院研修医（皮膚科学）（宮地良樹教授）
- 1994年4月 群馬大学医学部大学院博士課程 入学
- 1998年3月 群馬大学医学部大学院博士課程 修了
- 1998年4月 群馬大学医学部皮膚科学教室助手
- 1998年10月 カナダ・マクマスター大学病理学教室 postdoctoral fellow（John Bienenstock 教授）
- 2000年10月 群馬大学医学部皮膚科学教室助手（石川 治教授）
- 2008年4月 群馬大学大学院医学系研究科皮膚科学講師
- 2017年4月 岩手医科大学医学部皮膚科学講座 教授
- 2026年4月 岩手医科大学附属病院 副院長、医療安全管理部 副部長

講演 1

結節性痒疹治療のパラダイムシフト
— デュピルマブの可能性 —

中 島 沙 恵 子

京都大学医学部附属病院かゆみセンター・センター長、
アレルギーセンター・副センター長

結節性痒疹（Prurigo Nodularis: PN）は、激しいかゆみを伴う結節性病変を特徴とする炎症性皮膚疾患であり、患者の生活の質（QOL）を著しく損なうのみならず、不眠や抑うつなど精神的影響を伴うことも多い。慢性的な掻破行動や Th2 優位の免疫学的異常などが複雑に関与し PN の病態が形成されるが、従来の治療法は対症的なものが多く、症状を十分にコントロールできない症例が少なくない。

しかしながら、2023年に PN に対してデュピルマブの適応が追加されたことを契機に、複数の生物学的製剤が相次いで保険診療に導入され、PN 治療は新たな段階を迎えている。これにより疾患コントロールが現実的に可能となりつつあり、従来の外用療法や光線療法に加え、全身療法をいかに従来の治療と組み合わせるかが臨床的課題となっている。

本講演では、PN の臨床的特徴や病態について最新の知見を交えつつ概説するとともに、全身療法の選択肢としてデュピルマブの有用性を含め、エビデンスに基づいた治療戦略について考察する。PN 診療における最適な治療戦略を共有し、今後の臨床に役立てていただける機会としたい。

略 歴

2003年 大阪医科大学医学部卒業

2012年 京都大学大学院医学研究科博士課程卒業（医学博士）

2015年～2017年 米国 NIH, NIAID 客員研究員

2017年～2020年 4 月

京都大学大学院医学研究科皮膚科学教室・助教

2020年 5 月～2021年 4 月

同・講師

2021年 5 月～ 京都大学大学院医学研究科・炎症性皮膚疾患創薬講座（皮膚科兼任）・特定准教授

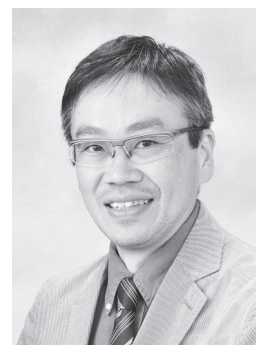
2026年 4 月～ 京都大学医学部附属病院かゆみセンター・センター長、アレルギーセンター・副センター長

講演 2

水疱性類天疱瘡における新規治療戦略：
デュピクセントの位置づけ

鶴 田 大 輔

大阪公立大学大学院医学研究科 皮膚病態学 教授



水疱性類天疱瘡（BP）は、そう痒を伴う浮腫性紅斑や緊密性水疱、びらんを特徴とする自己免疫性水疱症である。BP 患者の年齢中央値は81歳で、80歳代に最も多く発症し、糖尿病（40.9%）、高血圧（33.6%）、脳血管疾患（17.4%）などの合併症を高頻度で認める。

BP 患者の疾病負荷は「身体的負荷」「心理的負荷」「社会経済的負荷」「治療による負荷」の4つに分類される。自己免疫性水疱症患者の DLQI スコア中央値は16と高値を示し、患者の QOL は著しく低下する。また、BP 患者の90% 以上が感染症を発現し、43% で入院や死亡に至る全身性感染症が認められるなど、重篤な合併症のリスクも高い。

従来の基本治療である高用量ステロイド投与は、経口投与が69.7%で行われ、入院率54.1%、死亡率8.0%という現状があり、高齢患者における治療による負荷も課題となっている。長期ステロイド使用に伴う感染症リスクや有害事象の増加も懸念される。

このような背景から、デュピクセント（デュピルマブ）は、ステロイド減量効果と QOL 改善が期待できる新たな治療選択肢として位置づけられる。

高齢 BP 患者の診療においては、多面的な疾病負荷を考慮し、デュピクセントの適正使用を含めた包括的な治療戦略が重要である。

略 歴

平成4年3月 大阪市立大学医学部卒業
平成4年6月 大阪市立大学医学部附属病院臨床研究医
平成10年6月 生登会寺元記念病院皮膚科医長
平成11年3月 大阪市立大学大学院医学研究科博士課程修了（医学博士 号）
平成12年4月 米国ノースウエスタン大学博士研究員
平成15年4月 大阪市立大学医学部附属病院病院講師
平成18年4月 大阪市立大学大学院講師
平成23年1月 久留米大学医学部准教授
平成23年9月 大阪市立大学大学院講師、久留米大学客員准教授
平成25年4月 大阪市立大学大学院教授
平成27年4月 大阪市立大学医学部附属病院病院長補佐
平成29年4月 大阪市立大学大学院医学研究科長補佐
平成31年4月 大阪市立大学特命副学長（国際交流担当、国際センター所長）
令和4年4月 大阪公立大学特命副学長（国際広報担当）
令和6年4月 大阪公立大学医学研究科長・医学部長
令和7年6月 全国医学部長・病院長会議（AJMC）副会長

講演 1

高齢慢性腎臓病（CKD）患者への帯状疱疹治療
～安全性を踏まえた最適治療～

猪 阪 善 隆

大阪大学大学院医学系研究科 腎臓内科学講座 教授



帯状疱疹は高齢者に多く、腎機能障害を合併する例が少なくない。慢性腎臓病（CKD）患者では、免疫抑制薬使用例や腎機能低下自体が帯状疱疹発症のリスク因子とされている。抗ヘルペスウイルス薬の多くは腎排泄性であり、腎機能低下例では神経学的副作用や急性腎障害（AKI）を生じることがある。AKIは尿中での難溶性結晶による尿細管閉塞が原因と考えられてきたが、その病態は必ずしも単純なものではないことが分かってきた。抗ウイルス薬結晶は尿酸結晶に類似した形態を示し、インフラマソーム活性化を介した腎障害への関与が示唆されている。本稿ではこれらの機序を概説するとともに、薬物動態の観点から、腎機能障害を有するCKD患者における帯状疱疹治療薬としてのアメナメビルの有用性について検討する。また、CKD患者における抗ヘルペスウイルス薬投与では、腎機能に応じた用量調整と十分な水分管理が不可欠であり、薬剤選択を含めた総合的な治療戦略の構築が求められる。これらの知見は、腎機能障害患者における帯状疱疹治療の安全性向上に寄与し、臨床現場での適正使用に重要な示唆を与えるとともに、今後の治療指針の確立にも資すると考えられる。

略 歴

昭和63年 3月 大阪大学医学部卒業
昭和63年 7月 大阪大学医学部附属病院において臨床研修に従事
平成元年 7月 国立大阪病院において臨床研修に従事
平成2年 4月 大阪大学大学院医学研究科博士課程入学
平成6年 2月 米国ユタ大学医学部腎臓・高血圧教室リサーチフェロー勤務
平成7年 1月 大阪大学医学部研究生（内科学第一教室）として勤務
平成16年10月 助手（大阪大学大学院病態情報内科学）として勤務
平成17年 2月 准教授（大阪大学大学院先端移植基盤医療学）として勤務
平成21年10月 准教授（大阪大学大学院老年・腎臓内科学）として勤務
平成21年10月 大阪大学医学部附属病院 腎臓内科科長・血液浄化部 部長就任
平成22年 4月 大阪大学附属病院 病院教授
平成27年10月 教授（大阪大学大学院 腎臓内科学）として勤務

現在に至る

講演 2

带状疱疹診療の診断と治療 Update

川 村 龍 吉

山梨大学医学部皮膚科学講座 教授



带状疱疹は、加齢やストレスなどに伴う水痘・带状疱疹ウイルス（varicella-zoster virus: VZV）特異的細胞性免疫の低下により、潜伏感染していたウイルスが再活性化して発症する。患者数は高齢者を中心に増加傾向にあるが、2014年の水痘ワクチン定期接種化以降、とりわけ子育て世代での増加が著しく、今後さらなる増加が予想されることから、社会的関心が高まっている。

本講演では、主に皮膚免疫の観点から、VZV に対する生体防御機構について概説する。特に、抗 VZV 免疫および带状疱疹ワクチンの効果発現における自然免疫応答の重要性に触れ、带状疱疹に対して有効な細胞性免疫が成立するメカニズムを解説する。

また、本邦で広く使用されているアメナメビルについて、1日1回投与であり、腎機能に応じた用量調整を必要としないという特徴を踏まえつつ、処方時の注意点を再確認する。さらに、概日時計（サーカディアンリズム）がVZVの複製やDNA合成に及ぼす影響についても言及し、時間治療学の観点から、带状疱疹治療におけるアメナメビルの有用性を高める治療戦略について共有したい。

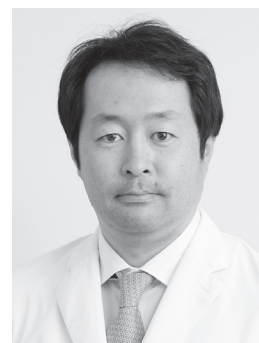
略 歴

平成2年3月 山梨医科大学医学部卒業
平成2年6月 山梨医科大学医学部附属病院 皮膚科 研修医
平成4年6月 静岡県立蒲原総合病院 皮膚科 医員
平成6年1月 山梨医科大学 医学部 皮膚科 助手
平成7年7月 順天堂大学医学部免疫学講座（奥村康 教授）研究員
平成10年7月 米国国立衛生研究所／国立癌研究所皮膚科（A. Blauvelt）研究員
平成14年5月 山梨大学 医学部 皮膚科 講師
平成26年12月 山梨大学 医学部 皮膚科 准教授
平成29年1月 山梨大学 医学部 皮膚科 教授
令和3年4月 山梨大学病院 病院長補佐／感染制御部部長
令和5年4月 山梨大学病院 副病院長／安全管理責任者
山梨大学 評議員、副医学部長

長期罹患円形脱毛症における間質老化の解析

高 橋 岳 浩

東北大学ヘルススパン研究センター
皮膚老化抑制研究分野 准教授



当施設の臨床解析から、円形脱毛症（AA）の罹病期間が JAK 阻害薬に対する治療抵抗性と関連することが示されたが、その病態基盤は明らかでない。そこで、C3H/HeJ マウスを用いて短期および長期罹患 AA モデルを作製し、JAK 阻害薬応答性と病変部皮膚における遺伝子発現を比較するとともに、真皮間質の老化に着目した。ヒト AA 病変部およびモデルマウス皮膚に対して、細胞老化マーカー p16 および細胞老化随伴分泌形質（SASP）関連因子 CCL2 の免疫組織染色を行った。その結果、真皮における p16 陽性細胞数および CCL2 陽性細胞数は、ヒト長期罹患例と長期罹患マウスにおいて、短期罹患群より有意に多かった。さらに、間質老化を細胞と細胞外基質の両側面から捉えるため、各マウス群の皮膚から PDGFR α 陽性 CD45 陰性 EpCAM 陰性細胞をフローサイトメトリーで分取し遺伝子発現解析、併せて電子顕微鏡により真皮コラーゲンの超微細構造を解析した。これらの解析を統合し、長期罹患に伴う間質の質的変容が JAK 阻害薬治療抵抗性を形成する可能性について考察する。

略 歴

- 2002年 3 月 東京大学理学部物理学科 卒業
- 2008年 3 月 東京大学医学部医学科 卒業
- 2010年 4 月 東京大学医学部附属病院 皮膚科 医員
- 2015年 3 月 東京大学大学院 医学系研究科 博士課程修了
- 2015年 4 月 東京大学医学部附属病院 皮膚科 助教
- 2017年 1 月 Associate Research Scientist, Yale University School of Medicine, Department of Immunobiology (Akiko Iwasaki laboratory)
- 2023年 4 月 東北大学病院 皮膚科 講師
- 2026年 5 月 東北大学ヘルススパン研究センター (HeSReC) 皮膚老化抑制研究分野 准教授 (専任)
東北大学病院皮膚科 講師・外来医長 (兼任)

ヒト皮膚老化における線維芽細胞サブセットの1細胞 トランスクリプトーム・エンハンサー解析

中 溝 聡

京都大学大学院医学研究科 先端医療基盤共同研究講座
(皮膚科兼任) 特定准教授



皮膚老化は整容面のみならず、慢性炎症、創傷治癒遅延、発癌リスクとも関連する臨床的課題である。本研究では、加齢に伴うヒト皮膚線維芽細胞の分子変化と制御機構を明らかにするため、20～82歳のヒト上眼瞼皮膚22検体、計201,918細胞を対象に、5' single-cell RNA-seq/ReapTEC 解析を行った。12細胞種の比較では、線維芽細胞の割合が加齢と正相関し、細胞種別の発現変動解析でも線維芽細胞に最も多くの加齢関連変化を認めた。線維芽細胞を11サブクラスターに分類したところ、加齢により reticular fibroblast が増加し、NGFR 陽性 schwann-like fibroblast が減少した。一方、発現変動遺伝子数は superficial fibroblast で最多であり、ミトコンドリア Ca²⁺ 制御破綻とストレス応答を示唆する変化を同定した。さらに90,654個の皮膚エンハンサーを同定し、皮膚疾患 GWAS-SNP がこれらに濃縮することを示した。特に強皮症関連エンハンサーの一部は線維芽細胞または樹状細胞で加齢とともに発現上昇した。以上より、superficial fibroblast を中心とする線維芽細胞サブセットの転写・エンハンサー変化が、皮膚老化に関与する可能性が示された。

略 歴

2001-2006：佐賀医科大学（現 佐賀大学） 医学部医学科
2009：京都大学病院皮膚科 後期臨床研修医
2011-2014：京都大学 医学部医学研究科 医学専攻 博士後期課程
2016-2019：シンガポール科学技術研究庁 上級研究員
2020-2022：京都大学大学院医学研究科 皮膚科学 助教
2023-：京都大学大学院医学研究科 先端医療基盤共同研究講座 特定講師
2024-：京都大学大学院医学研究科 先端医療基盤共同研究講座 特定准教授

ロングリードシーケンスを用いた高齢発症末端 メラノーマのゲノム解析

肥 田 時 征

札幌医科大学医学部皮膚科学講座 准教授



末端メラノーマは体細胞変異数が少なく、構造異常優位のゲノム背景を示す。高齢での発症が多いことから、加齢に伴うゲノム異常の蓄積が関与する可能性がある。一方、発生部位が荷重部に偏ることから、機械的刺激も発がん要因として考えられる。近年、腫瘍化の早期から複雑なゲノム構造異常が報告されており、従来の皮膚メラノーマの変異蓄積モデルとは異なる発がん過程が示唆されている。本研究では、加齢、テロメア維持機構、複雑構造異常の観点から、末端メラノーマの発がん機構を検討している。腫瘍・正常組織ペアに対してナノポアロングリードシーケンスを行い、テロメア長、*TERT* 周辺構造異常、複雑構造異常を解析した。予備的解析では、末端メラノーマ組織におけるテロメア長短縮と、*TERT* 周辺の非コード領域再構成を含む複雑構造異常の関与が示唆された。ロングリードシーケンスは、ショートリードシーケンスでは把握が困難な複雑構造異常やテロメア構造を評価できる。今後、症例を蓄積し、塩基修飾を含めた統合的解析を進めることで、末端メラノーマに特有の発がん過程の解明を目指す。

略 歴

2000年 札幌医科大学医学部卒業
 2000年 札幌医科大学医学部皮膚科
 2001年 札幌厚生病院皮膚科
 2001年 札幌医科大学院
 2005年 札幌医科大学医学部皮膚科 助手
 2005年 ロンドン大学セントジョージ校基礎医学科 訪問研究員
 2007年 札幌医科大学医学部皮膚科 助教
 2014年 札幌医科大学医学部皮膚科 講師
 2022年 札幌医科大学医学部皮膚科 准教授
 2024年 札幌医科大学医学部皮膚科 准教授（病院教授）現在に至る

一般演題 抄録

1 大阪・関西万博大規模コホートにおける皮膚老化の多因子構造と全身老化指標との関連

久野 彩、中川誠太郎、藤本 学

大阪大学 皮膚科

皮膚老化の多次元構造を万博来場者等約48万人の横断研究（同一機器で世界最大規模）で検討した。14皮膚指標を因子分解し4因子を抽出、加齢に伴い個人差が拡大する因子と収束する因子が存在した。特に真皮構造を反映する因子は加齢に伴い最も個人差が拡大した。位相角との関連では、一部の因子が異なる効果の方向を持つことが明らかとなった。皮膚老化は多因子構造を持ち、複合指標では見えない関連が因子分解で初めて検出される。

2 第10回 NDB オープンデータより検討した皮膚がん治療の実際

横見 明典、高塚麻由香、直原 成美、須藤 ゆか、後藤 範子

市立豊中病院 皮膚科

今回我々は、厚生労働省が公表している、第10回 NDB オープンデータ（2023年4月～2024年3月診療分）より、厚生労働省が定める医科診療報酬点数表のK007（皮膚悪性切除術）を元に、年齢、性別、地域について検討した。総数は39,820件、内訳は男性20,239件、女性19,581件であり、男性のピークは80～84歳で3,854件、女性のピークは90歳以上で3,786件あった。上記に関して、当院でのデータ及び症例交えて若干の文献的考察交えて報告する。

3 顔面画像解析システムを用いた有棘細胞癌患者の皮膚老化の検討

神人 正寿、坂本 翔一、山本 有紀

和歌山県立医科大学 皮膚科

慢性紫外線曝露に伴う顔面皮膚老化が皮膚有棘細胞癌リスクを反映するとの仮説のもと、VISIA®-Evolutionを用いて患者10例と対照群18例を解析した。有棘細胞癌群ではPOREスコア低値、RED AREAスコア高値を示し、腫瘍径との相関傾向を認めた。したがって、POREスコアに加えRED AREAスコアを測定することで、有棘細胞癌発症のリスクを予測できる可能性がある。

4 高齢者に発症した深部解離性皮下血腫の1例 — 抗凝固薬内服下での治療経過と考察 —

鈴木 琢

横浜総合病院 皮膚科

84歳女性。ダビガトラン内服中に右下腿を打撲し、急速に増大する皮下血腫と壊死を認め、深部解離性皮下血腫（DDH）と診断。早期の切開および凝血塊の排出後、陰圧閉鎖療法を導入し、肉芽形成を得て分層植皮術を施行、生着良好で上皮化に至った。高齢者や抗凝固薬内服患者では軽微な外傷でも DDH を生じうるため、蜂窩織炎との鑑別と早期外科的介入が重要である。

5 VZV 髄膜脳炎を発症した高齢者の一例

柴垣 裕、岡本 崇、島田 眞路、川村 龍吉

山梨大学医学部 皮膚科

84歳男性。右三叉神経第一枝領域帯状疱疹に対し、アメナメビル内服加療をしていたが汎発化したため、第3病日よりアシクロビル点滴加療に切り替えた。皮疹は上皮化した。第14病日より意識障害が出現し、VZV 髄膜脳炎の診断となった。

近年アメナメビルは髄液移行性が低いため、VZV 髄膜脳炎を併発しやすいとする論文が複数報告されているが¹、内服する抗ウイルス薬の違いでVZV 髄膜脳炎の発症率に違いはあるのか考察した。

6 高齢者のリウマチ性多発筋痛症に発症した播種性ノカルジア症の1例

佐藤 佑哉¹、濱口 儒人¹、大石 京介¹、前田進太郎¹、松下 貴史¹、久保 超人²、谷内 克成³

¹金沢大学 皮膚科、²同感染制御部、³能登総合

89歳男。リウマチ性多発筋痛症に対しプレドニゾロン10mg/日を内服していた。右手背をバラの棘で受傷後、紅斑と腫脹が出現し、皮下膿瘍を形成。創部培養で *Nocardia nova* が検出。胸部CTで右肺に結節影、頭部MRIで右側頭葉にT2強調像および拡散強調像で高信号域を認め、播種性ノカルジア症と診断。ST合剤、イミペネムにより皮下膿瘍は上皮化し、肺と脳の結節影は消退。ミノマイシン、クラリスロマイシンに変更し経過観察中。

7 中條・西村症候群モデルマウスにおける加齢性病態と免疫老化の解析

原 知之¹、木下 晃²、濱崎 純³、邊見 弘明⁴、加藤 喬^{4,5}、佐々木 泉⁴、稲葉 豊¹、山下 友佑⁶、奥崎 大介⁷、吉浦孝一郎^{2,8}、村田 茂穂³、神人 正寿¹、改正 恒康⁹、金澤 伸雄^{1,10}

¹和歌山県立医科大学皮膚科、²長崎大学原爆後障害医療研究所人類遺伝学研究分野、³東京大学大学院薬学系研究科蛋白質代謝学教室、⁴和歌山県立医科大学先端医学研究所生体調節機構研究部、⁵和歌山県立医科大学リウマチ・膠原病内科、⁶和歌山県立医科大学血液内科、⁷大阪大学免疫学フロンティア研究センターヒト免疫学（単一細胞ゲノミクス）、⁸長崎大学大学院医歯薬学総合研究科人類遺伝学先端医療研究コアユニット、⁹和歌山県立医科大学産官学連携推進本部 ¹⁰兵庫医科大学皮膚科学

我々は自己炎症性疾患である中條・西村症候群の創始遺伝子バリエーション（Psm8 p.G201V）マウスを樹立した。本マウスは進行性脂肪萎縮を示し、野生型より短命で1年以内に半数が死亡した。免疫系ではナイーブT細胞減少とメモリーT細胞増加という免疫老化に加え、加齢に伴うIL-6やIL-1 α 等の炎症性サイトカイン上昇が確認された。本マウスは加齢・老化に伴う自己炎症病態の解明に有用なモデルである。

8 COL17A1 Restoration as a Key Mechanism in Apocynin's Anti-Senescence Effect

Tuba M. Ansary, Koji Kamiya, MD Razib Hossain, Mamitaro Ohtsuki, Mayumi Komine
Department of Dermatology, Faculty of Medicine, Jichi Medical University

UVB reduces COL17A1, driving keratinocyte senescence (p16, γ -H2AX, SA- β -gal, PAI-1, Lamin B1 loss). Apocynin dose-dependently restores COL17A1 and suppresses these senescence markers via p38/AP-1 modulation, highlighting COL17A1 recovery as central to anti-aging protection.

9 split skin IIF で表皮側陽性を示した粘膜類天疱瘡に乳癌を含む多臓器腫瘍性病変を合併した 1 例

鈴木 梨沙、濱 菜摘、須田有裕子、木村 春奈、長谷川瑛人、阿部理一郎

新潟大学医歯学総合病院皮膚科

76歳、女性。体幹四肢に紅斑、水疱、びらん、口腔内にびらんを認め、抗 BP180NC16A 抗体、抗 BP230 抗体陰性。病理組織で表皮下水疱と好酸球浸潤、DIF で IgG、C3 が表皮真皮境界部に線状に陽性、1M NaCl split skin IIF で表皮側に20倍陽性。粘膜類天疱瘡と診断し PSL 内服にて改善。治療開始 4 か月後、乳癌を含む多臓器腫瘍が判明。表皮側陽性例でも、抗 BP180 抗体陰性かつ粘膜病変を伴う高齢発症例では標的抗原の追加検索とともに悪性腫瘍合併に留意すべきと考えた。

10 マウス表皮での酸性セラミダーゼ過剰発現は角層セラミドの減少から老人性乾皮症を生じる

芋川 玄爾^{1,2}、高田真理子¹、指川（木村）未歩²、小宮根真弓²、大概マミ太郎²

¹宇都宮大学 バイオサイエンス教育研究センター、²自治医科大学 皮膚科

老人性乾皮症は表皮セラミダーゼ活性の上昇に伴う角層セラミドの減少に起因することはすでに報告した。自己分解による活性型酸性セラミダーゼを遊離する C30A-mutated 酸性セラミダーゼをインボルクリンプロモーターを用いて表皮で過剰発現させたトランスジェニックマウス（TG）は生後 3 週で表皮の肥厚を伴うことなく落屑性皮膚が出現し、水分量（Capacitance）が WT と比較して顕著に低下した。また、免疫染色によって皮膚神経反発因子セマホリン量の表皮での顕著な低下と痒み神経線維の表皮への顕著な伸張を引き起こし、老人性乾皮症皮膚の特徴を示した。

11 多型慢性痒疹を再考する

石川 治

石井病院皮膚科

当院で多形慢性痒疹と診断した77例について皮膚症状、検査成績（血清 IgE 値、TARC 値、末梢好酸球数）、アトピー性疾患合併の有無について検討した結果を報告する。多形慢性痒疹の概念は曖昧な点が多く、確立された診断基準はない。今回の解析結果を踏まえ、多形慢性痒疹を加齢性多形皮膚炎と称することを提唱するとともに、新規の本邦診断基準を提示して皆様のご批判を仰ぎたい。

12 ボリコナゾールの長期内服中に生じた多発日光角化症・有棘細胞癌の1例

西田 悟^{1,2}、安野秀一郎¹、浅野 伸幸¹、下村 裕¹

¹山口大学 皮膚科、²山口赤十字病院 皮膚科

55歳男．頭部の有棘細胞癌に対して複数回の手術歴あり．侵襲性肺アスペルギルス症に対して長期にボリコナゾールを内服していた．ボリコナゾールの光線過敏症と長期内服によって日光角化症・有棘細胞癌が発症したと考えられた．イミキモドの外用にて局所の病変は改善を認めたが，その後に全身のリンパ節に転移を認めニボルマブの投与を行った．

13 超高齢者の顔面に生じ、放射線治療が奏功したメルケル細胞癌の1例

戸次 優太、正嶋 千夏、光井 康博、西村 友紀、新熊 悟

奈良県立医科大学 皮膚科

106歳女性。約半年前に左頬部に腫瘤が出現し急速に増大傾向のため前医を受診し、皮膚生検が施行されメルケル細胞癌と診断された。加療目的に当院を受診し、放射線治療によって左頬部の腫瘤は縮小傾向となった。約1か月後に左こめかみに腫瘤が出現し、同部位に対し放射線治療が開始された。全身状態悪化のため一度中断されるも、回復後に照射再開し治療完遂され、腫瘤は縮小傾向となった。

14 高齢天疱瘡患者に対するリツキシマブ導入例と当科投与例の臨床的検討

鈴木優紀恵、廣保 翔、鶴田 大輔

大阪公立大学 皮膚科

リツキシマブ（RTX）は難治性天疱瘡に高い有効性を示す一方、感染症リスク増加などの重篤な副作用が報告されており、高齢者への導入には慎重な判断を要する。今回、71歳の難治性天疱瘡患者に RTX を導入し、重篤な副作用を来すことなく疾患制御を得た。本発表では本症例の経過提示と、さらに当科で RTX を投与した天疱瘡8例の臨床経過を併せて検討することで、高齢例における RTX 使用の実際と留意点について考察する。

謝 辞

第22回加齢皮膚医学研究会の開催・運営にあたりまして、下記の皆様方から格別のご支援・ご協力をいただきました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

アッヴィ合同会社

サノフィ株式会社

サンファーマ株式会社

日本イーライリリー株式会社

ブリストル・マイヤーズ スクイブ株式会社

マルホ株式会社

(敬称略・五十音順)



ヒト化抗ヒトIL-23p19モノクローナル抗体製剤

スキリージ[®] 

皮下注 150mg | 皮下注 75mg | 皮下注 150mg
シリンジ 1mL | シリンジ 0.83mL | ペン 1mL

皮下注射用リサンキズマブ(遺伝子組換え)製剤

Skylizi[®]

薬価基準収載

生物由来製品 劇薬 処方箋医薬品(注意—医師等の処方箋により使用すること)

※効能又は効果、用法及び用量、警告・禁忌を含む注意事項等情報等については
電子化された添付文書(電子添文)をご参照ください。

製造販売元

アッヴィ合同会社
東京都港区芝浦3-1-21

〔文献請求先及び問い合わせ先〕
くすり相談室
フリーダイヤル 0120-587-874

2025年3月作成
JP-SKZD-190031-7.0

abbvie